

海外養殖魚研究会報

第45号

発行：海外養殖魚研究会

平成2年10月16日

事務局：〒102 東京都千代田区麴町4-5
 榊国際水産技術開発内

第7麴町ビル555号
TEL:03-234-8847
FAX:03-239-8695

第45回海外養殖魚研究会が、平成2年10月15日（月）午後5時半～7時半に、JICA国際協力総合研修所 3階 303号室で行なわれました。

今回は、榊国際水産技術開発の池ノ上宏氏に「タイ国水産養殖の現状」について講演をお願いしました。なお、当日予定されていた赤津澄人氏による「ヒトミハタの種苗生産」は演者の都合により中止となりました。

研究会終了後には、恒例の懇親会が「メルツェン」で開かれ、14名が歓談しました。

研究会参加者は、下記の通りです。

池ノ上宏、赤井正夫、杉本正志、岡田秀之（国際水産技術開発）、中沢昭夫、牧之内貞治（海外漁業協力財団）、宮村光武、小林茂夫（フリー）、山川紘、鈴木重則、子乃衛（東京水産大学）、立川賢一（東京大学海洋研究所）、石井優一（D&Aエンジニアリング）、歳原隆文、鳥居道夫（水産エンジニアリング）、安斎保利（函館製網船具）、香原友志（水産経済新聞社）、池田成巳（緑書房）

タイ国水産養殖の現状 池ノ上宏（国際水産技術開発）

演者は、1988年から2年間、東タイのライオンで水産資源管理プロジェクトのチームリーダーをやってきた。この間にタイ国内を旅行して感じたことを述べる。

タイ国水産養殖業の特色は、その多様性と高度の伝統的技術の2点にある。数多くの養殖対象魚種が、水界、養殖形態、需要形態のあらゆるスペクトラムにおいて養殖されている。このような多様性は、近年におけるタイ国の急速な経済発展をもたらしたのと同じ諸要素によって形成されてきたものである。すなわち、ひと続きの広い国土（51万km²）、仏教を基盤にして形成された精神的均一性、大きな人口（5,500万人）、華僑の融和などの諸要素である。これに加えて、稲作技術体系に組み込まれた養殖技術の貢献も見逃すことができない。このような多様性は、常に多くの選択肢を持つという意味で、タイ国養殖業の持つ大きな財産といえる。

近年の急速な経済発展は、養殖業に他産業との諸資源をめぐる競争を余儀なくさせている。土地、水、労働力といった資源をめぐる競争で養殖業は後退を強いられている。経済発展は強い購買力を持った中間階級を産みだしているが、これは養殖業に高級魚介類の国内市場を提供している。環境変化は養殖業自身にも様々な変質をもたらし、これはマングローブ域や海岸地帯の乱開発、企業的養殖業の発展、過剰投資、過剰生産などといった現象として表出している。

このような現状のもとで、タイ国養殖業のとるべき選択肢は、適性な開発マスタープランに基づいた乱開発の防止、伝統的養殖業を維持することによる環境保全、依然として欠食、栄養失調などが残る東北タイにおける民生的養殖業の強化である。